

薬が効く、効かないの判断は

治験コーディネーター見習い中の薬局薬剤師が「薬担当者の小嘸」として、医薬品の開発や薬の使い方を医療関係者の視点から伝えていきます。

飲んでいる薬が本当に効いているのか疑問に思ったことはありませんか。

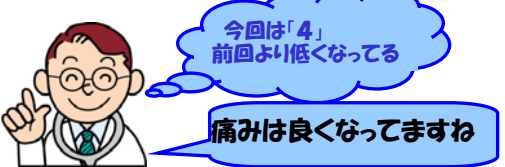
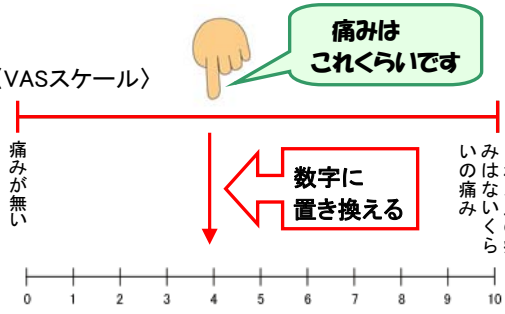
薬局でもらう薬には色々なものがあります。治験を含めて臨床研究では、病気に対して多種多様な薬を、検査や症状の確認方法を選び、科学的に効果があるのかを確認しています。

科学的な評価には、客観性が必要

例として、痛み止めの薬の評価方法について説明します。痛みというのは、人によって感覚が違います。「すごく痛い」とか「ちよっと痛い」といった表現でお医者さんに説明したことがある人も多いのではないのでしょうか。その感覚も一カ月後や、長いと半年後に再診する頃には忘れていて、どれくらい痛みが良くなったのかがわからなくなってしまうことがあります。



《直感で痛みがどれくらいかを評価》



そこで、VASスケールと呼ばれる方法を利用します。横向きに10cmの直線を引いて、左端を痛みがまったくない場合で右端を痛みが最も強い場合として、受診した当時の痛みがどれくらいか直線上にチエックを入れてもらいます。それを、左端から何cmかを計測して記録することで、痛みがどれくらいあるかを数字として表すことができます。※左図参照

特殊なものばかりではなく簡単なものも

VASスケールは普段聞きなれない言葉ですが、他にも血液の検査値など簡単な指標を利用する場合もあります。一例として糖尿病患者さんの血糖値を下げる薬の評価方法を紹介します。食事後の血糖値の変化を確認するため、一定のカロリーに調節した食事を取り、決められた時間が過ぎた後に血液を採って、血糖値を確認する方法があります。

食事をとり、血液の検査結果を確認するだけなので、特に難しく考えることはありません。

病院・薬局でもらう薬は、評価方法は様々ですが、製薬企業が調査して厚生労働省が判断することで、きちんと効果が確認されている薬です。逆に、新薬に効果がないと結果がでて医薬品として発売できなかったものも多数ありました。

皆さんが飲んでいるお薬は効果が確認されている薬ですから、治療に自ら参加する意味でもお薬に効果があることを意識して服用しましょう。

なかよし薬局では、地域貢献型の医療を目指して一緒に仕事をしてくれる薬剤師を募集しています！
詳しくは下記連絡先まで！薬剤師を対象とした復職支援も行っています！